

論 叢

リーフレット版

No 8 1988. 3. 5

定価
100円

〔編集・発行〕

共産主義者同盟(赫旗)首都圏委員会

解体する戦後帝国主義政治秩序に、 プロレタリアートの対抗原理を撃ち込め!

日帝の新国家主義への統合攻撃—プレXデー状況に抗し、 人民の共生・連帯運動の前進を

〈はじめに〉

時代の構造的な変動が、社会・経済の様々な環境の激変となってあらわれ、多くの人々が、実生活を通じてその徴候を感じとりつつある。これまでの人類の歴史がそうであったように、こうした社会・経済上の変動は、徐々に、あるいはまた急速に、政治的な変革となって現実化することは避けられない。この数年間における、いくつかの重大な事態——帝国主義諸列強における新保守主義・新国家主義の台頭、パックス・アメリカナの崩壊、ソ連におけるゴルバチョフ改革・「ペレストロイカ」の進展、フィリピン、韓国等における新たな人民闘争の前進等々——は、現代世界における巨大な歴史的転換の露頭に他ならない。しかもこれは、事のはじまりにすぎない。なぜなら、一連の政治的変動にもかかわらず、いぜんとして社会・経済上の激変は、その安定的な状態に至りついたとはいえない。むしろ、そうした政治上の変化が、一層の社会、経済的流動を促すという相互作用が、この数年の経過の中から観察される。こうした、政治的社会的な変動が、根底的な社会革命と、その前提としての政治革命の実現のための必須の条件をなすことは自明である。だが、この革命闘争が、どのようなプロセスを通り、どのような主体と、手段によって実現されるのか? この点についての回答は完全には誰によっても回答されていない。反対に、こうした条件の下で、革命を回避し、

支配階級の地位を守ろうとする側にとっても、その為の手段、条件について明確なプランがあるわけではない。

問題の回答はいうまでもなく問題そのものの中に含まれているのであって、事態に対して能動的な変革を望むのであれば、一層具体的に、この政治・社会の変革の性格を読みとることができなければならない。我が直面している課題はまさにこれである。事態の変動に追いつき、これを先回りする政治的先見性を、変革の手段についての経験ならびに知識の飛躍的強化こそが求められている。我々は、88年を、こうした情勢の大変動に 대응する党主体としての飛躍と前進の年とするために奮闘しなければならない。その最小限の条件は、情勢に能動的に関与する政治的見地の基礎を整えることである。現実の階級闘争に学びながら、この課題の達成に全力を挙げよう。

1 87年天皇訪沖阻止闘争の教訓

現実的な分析は、闘争の具体性においてなされねばならない。いうまでもなく我々は、『論叢』第4号において提起したように「地域政治闘争」を当面する主要な戦術としながら、反天皇闘争を中心とする活動を行なうことを決定し、87年10月を前後する天皇・皇族の沖縄訪問阻止の闘いを最大の課題として闘いを進めてきた。広汎な大衆闘争の中での我々の貢献は、微々

たるものにすぎなかったし、それに加えて、即ち自己の力量の小ささに還元できない闘いの不充分性についても反省しなければならない。(この点については後述)とはいえ、87年9～11月の間の天皇訪沖阻止実をはじめとする、全国各地で闘われた反天皇闘争の広がり、さらに様々の戦術を結合した多面的、立体的な豊富化等、多くの成果があった。たしかに、ヒロヒトの病気によって、天皇そのものによる訪沖、「慰霊」行為は、日帝支配階級によって断念されたとはいえ、皇太子・浩宮等皇族の訪沖と、天皇の代理としての摩文仁「参拜」＝「慰霊」行為そのものを阻止しえなかったし、その間の日帝警察権力一機動隊と、一部自衛隊をも動員した、首都一沖繩における準戒厳令体制と、これに守られた天皇主義右翼の目に余る行動を打ち破るには至らなかった。

とはいえ、この一連の闘いの中で、日帝支配階級による沖繩人民に対する天皇主義的統合攻撃は、確かに少なからぬ反撃を受けたことは事実であろう。ヤマトにおいて広汎で大衆的な反天皇闘争が組織されたこと、そしてなにより、読谷村における「日の丸」焼きすて決起が果敢に闘われたことを頂点とする、沖繩人民の反日帝一反天皇主義、自立解放の闘いが、厳然と打ち抜かれたことがその証しである。

ヤマトにおける闘いにおいては、①4月以来の長期にわたって、天皇訪沖阻止の目的の下に、大衆的持続的な闘いと、その組織がつくられたこと。②同時に、全国各地において、地域に立脚した闘いが取りくまれ、またそのネット・ワークが形成されたこと。③在ヤマトの沖繩人の独自の闘いが、意見広告等活発に行なわれたこと。④反天皇を基軸としながら、沖繩闘争をはじめ、様々の政治的社会的諸領域における闘いが取りくまれたこと。⑤訪沖阻止実にとどまらず、さらに広汎な人民的共同闘争が実現されたこと。等々の得がたい経験と成果が獲得された。

だが、我々のこうした闘いへの関わりは決して充分なものではなかった点については卒直に総括しておかねばならない。これは一言でいって、我々の戦術シフトの転換の不徹底性によるところが大きい。地域政治闘争への転換が、単に主観的決意だけでできるもので

もないし、様々の部署に一律に機械的に地域政治的闘争の戦術を適用することが正しいわけでもない。転換に際しての過渡性は具体的な適用にあたっての様々な他の戦術とのくみあわせの工夫が避けられない。地域活動への定着と習熟がまず第一であり、次にこれを一個の政治闘争に組織する指導力量が蓄わえられなければならない。これは当該細胞だけの問題ではなく、全党的な政治の普遍的な水準によってこたえられなければならない問題である。他方では政治カンパニアに対応する特別のスタッフの体制が整備されなければならない。これらの不備を早急に克服しなければならない。

2 知花昌一さんの「日の丸」焼き棄て決起の画期的意義

こうしたヤマトの闘いの中で、沖繩においては、昨春以降反天皇の広汎な政治闘争がとりくまれた。とりわけ、10月26日読谷村ソフトボール会場において、「日の丸」強要に抗議し、決然とこれを引きずりおろし、焼き棄てた知花昌一さんの闘いの意義は決定的なものがあつた。これは、第一に、71～72年沖繩返還＝第三次琉球処分紛争の中での71年11月沖青同による国会爆竹決起、75年海洋博紛争の中での沖解同(準)によるひめゆり一白銀決起の闘いをひきつぐ、反日帝、沖繩人民の自立解放を求める実力決起であったことである。第二にこの闘いが読谷村における「村おこし」の文字どおり地をほうような地域活動を背景として、この地域運動を堅固な基礎としつつ、同時に優れた政治性・思想性を、反戦平和の活動の中で育て、「日の丸」強要の反動との闘いに際しては果敢に高度の政治的決起を実現する政治的な質・成熟に我々は学ばなければならない。地域政治闘争の一つの範としなければならない。

「平和のための読谷村実行委」での「村おこし」、反戦平和運動を背景として「日の丸」「君が代」反対の村議会決議等の成果にふまえ、さらに87年3月の高校生による「日の丸」拒否、「投げ捨て」等の闘い、沖繩戦の下でのチビチリガマにおける集団自決のほりおこし、とらえ直し学習にふまえた「平和の像」建設

等々といういく重にもつみ重ねられた闘いの地平からするとき、日本ソフトボール協会会長弘瀬勝の「日の丸」強要の暴挙は、絶対に許せるものではない。この尊大な攻撃に対して、あいまいな態度をとるのではなく、決然と「日の丸」をひきおろし、焼き棄てた闘いの果敢さ、政治性、思想性、道義性、人民的基础、歴史的背景、これらのどれをとっても、一連の沖繩における反天皇闘争の一切を集約するものとして闘われたことを、我々は学びとらなければならない。「『日の丸』は常に戦争の最先頭にあり、『日の丸』を振って戦争にかつぎだされていった。『日の丸』が人々の幸せのために役立った事など一度もありません。私は沖繩の真に平和を愛する人々と、愛する読谷村の真に戦争を拒否する人々を思い、自分の体験と学習を通して得た知識と自分自身をかけて『日の丸』をやきすてた。」知花昌一さんが、この闘いの後、不当逮捕を受ける直前に残した「読谷村の皆さんへ!!」というアピールが、その全てを物語っている。(読谷村の「チビチリガマ世代を結ぶ平和像」建設運動等については「沖繩を彫る」(金城実)を参照。映画「ゆんたんざ沖繩」も必見)

この闘いに対して右翼による陰險な白色テロルが知花昌一さんの経営する「はんざスーパー」に二度にわたって仕かけられ、さらに11月8日については、チビチリガマ「平和の像」を破壊するという前代未聞の大暴挙が行なわれた。読谷村の多くの住民によって、また遺族の、自からの万感の思いと文字通りの血涙をぬりこめて造りあげられた「平和の像」は凶にのつた右翼によってコナゴナに打ち砕かれた。「死者は二度殺されたようなもの……」という遺族の文字通りの血の叫びと痛恨の思いを忘れてはならない。像の前面には日の丸をつけたモリが突き立てられ次のような暴言が残されていた。「国旗燃ヤス村ニ平和ヲ早スギル 天誅下ス」。我々は国家権力に庇護され、帝国主義ブルジョアと、その寄生虫のアブク銭で飼育され、凶にのつた右翼の、この歴史的暴挙、暴言を同時代に生きた者として決して忘れない。「日の丸」の下の「平和」がそんなにも居心地が良いのか? 日帝足下の生活がそれほど良いのなら、我々は必ずこの連中を、国際人

民闘争の烈火の中で日帝もろとも焼き尽さなければならない。

すでに本年1月26日から、知花昌一さんと、その闘いの渦中でやはり不当逮捕を受けた知花盛康さんの裁判闘争がはじまっている。この闘いを支持、支援し、なんとしても勝利をかちとらねばならない。また日本ソフトボール協会弘瀬の責任を追及しなければならない。さらには、我々みずからの足もとから、「日の丸」「君が代」反対の闘いをおこし、これによって、沖繩人民の自立解放闘争への連帯をめざさなければならない。

3 プレ・Xデー状況の現実化と反天皇闘争の前進

人間の有限の生命それ自体が歴史を画すという観念は、支配階級の政治的目的に従ってのみ現実的なものとなるのであり、ヒロヒトの生命がまさにいま、そうした政治的操作の対象物として扱われている。ヒロヒトの病状は臍ガンと推測され、手術の様態、事後の報道と状況証拠としての浩宮の結婚問題についての扱い等総合的に判断して、ヒロヒトの生命は、88年中に終わること、そしてその死は病状第一報から一週間前後でおとずれること等が予測されている。(「反天皇制運動全国通信」第2号「天皇の病氣」武沢信夫)

Xデーは文字通り指呼の間に迫ったといつてよい。従って本年前半期における一連の反天皇闘争、「日の丸」「君が代」反対闘争、4.29闘争等が、極めて重要となってくる。反天皇の「緊急提案」を真剣に受けとめ、その準備を急ごう。日帝ブルジョア階級独裁の側においても、86年東京サミット以来の首都圏準戒厳令体制は、若干の規模縮小はあったものの、都心部においては全くの日常的な体制となっている。権威主義的国家主義体制の一個の現象に他ならない。こうした警備の強化にとどまらず、極めて挑発的な攻撃も仕かけられている。日本赤軍を口実とする全国的な一斉不当捜査がそれであり、これと軌を一にして「大韓機事件」をテコとした「国際テロリズムキャンペーン」が、反共主義、民族排外主義の動員をとまいつつくり広げられ、あらゆる不当弾圧、予防反革命が、ソウル五

輪を背景として正当化されている。また他方で「赤報隊」を名の白色テロルによって、マス・メディアに対する言論統制が一層強められている。これは極めて謀略的性格の強いものであり、その目的が極めて高度の政治的レベルの言論統制にあること、マス・メディアの国家主義的フレームへの誘導を明確な目的としていること、さらにその後のニセ「赤報隊」の横行、天皇主義右翼の活性化などの波及効果を生み出していること等からも明らかであろう。

こうした中で、首相竹下は、本年1月4日、13人もの閣僚をひきつけて伊勢神宮を参拝した。竹下自身これについて「(靖国とは)次元の違う問題」「議論をする以前の問題」として完全に居直り、実質的な公式行事化を行ないつつある。これは国家神道—天皇主義的政治統合が、「対外的配慮」を除外すれば、日帝ブルジョアジーの既定方針であることを公言しているに等しい。いうまでもなく、伊勢神宮は、靖国神社と並ぶ国家神道の二大支柱の一方である。国家神道、天皇主義の民族排外主義、国家至上主義的内実が徹底して暴露され糾弾されなければならない。

さらに87年12月28日民社党衆議員議員滝沢幸助によって、Xデーにさいしての法制的不備を補う旨の質問が国会に出された。民社党議員が、天皇主義を翼賛し、天皇制を積極的に強化したことも忘れてはならない。つい2月11日「建国記念日」においては、実質的な政府公式行事としての「国民の祝日を祝う会」(五島昇会長)と、より神道色の強い神社本庁等による「日本の建国を祝う会」(黛敏郎会長)とに分裂することになった。だがこれは、すでに多くの人々が指摘する通り、本質的な分裂・対立ではなく、相互補完的な二面作戦であるとの認識が必要である。

他方こうした攻撃と闘う勢力もまた着実に前進してきている。草の根天皇主義のぶ厚い層に比して、いまだその萌芽にすぎないとはいえ、大衆的民主的な闘争課題として公然と反天皇を掲げる闘いが地域からわきおこってくる情勢は極めて重要である。この闘いの発展を促し進めなければならない。反天皇制運動の全国交流の定着と前進がそれであり、また、昨年12月20日結成された、「日の丸・君が代に反対するネット・ワ

ーク」についても注目していきたい。とりわけ後者については、地域における反天皇闘争が、否応なく直面する課題としての「日の丸・君が代」反対の闘いを、正面にすえていること具体性、現実性に、その実践的意義がある。またすでに提起した知花さんの闘いを支援する闘いが、「『チビチリガマ世代を結ぶ平和の像』破壊に抗議し考える会」等、各地でとりくまれており、この発展にも力を尽さなければならない。

4 反天皇闘争と地域政治闘争の展望

すでに冒頭でふれたように、我々は時代の大転換を経験しつつある。昨年10月19日のニューヨーク市場にはじまる株価の大暴落は、この事を象徴的に示す出来事であった。世界経済が、その基軸構成を、金融操作と、ソフトに頼る構造に変質しており、これと相即して、実体経済の稀薄化と、多国籍企業化に伴う、産業の空洞化が進行している。

貿易赤字と財政赤字(「双子の赤字」)を基因とするアメリカ経済の没落こそが、この間のドル安の原因であり、また今回の株価暴落の根拠でもあった。これは、帝国主義諸列強間における米帝の相対的没落を意味するだけでなく、この間のサミット—G5、G7体制の破綻と手直しのくり返しによって明らかにされたように、米帝の覇権をひきつぐ帝国主義の不在、帝国主義諸列強の絶対的没落をも意味しているのである。アウトルギー化と、市場再分割戦に訴えない限りで、即ち米帝覇権下の国際協調体制にしがみつくなりで、ドルの下落に示される米経済の没落は、一定のタイム・ラグをおきながら、帝国主義諸列強の没落の同時的進行を促す。SDIに象徴される軍事的、科学技術的なヘゲモニーの維持の政策は、さらに悪循環となってこの過程の進行を促すことになる。これに抗して、帝国主義的海外市場の確保は国際協調体制の攪乱要因となって破局的な結果をもたらすだけでなく、資本の国際化によって動機づけられた各国経済の動向と基本構造からしてもはや後もどりすることができない。こうして、高度化し、国際化した資本は、第三世界に投下されるや否や、その当該国民経済に決定的に破壊的な作用を

もたらす。これに抗する民族的政治的自立は、いぜんとして現状にあっては国際的な帝国主義体制の重圧下での異常な困難を強制されることになる。NICs諸国の成長は、まさにNICs的条件においてのみ可能であり、いずれこの世界構造の垂直的二極分岐の力に抗することができなくなるであろう。

こうした世界経済過程が一国的にもたらす結果は一層深刻である。わが国資本主義が、戦後相対的安定期の下での高度成長が蓄積してきた社会的、政治的システムの悲劇的な解体と再編が現在進行している。戦後階級編成の実体的中軸をなす、新旧小ブルジョアジー—組織労働者上・中層を実体的な構成要素とする莫大な量の「中間層」が、力づくで急速に解体されていく。「従来型の産業の衰退、福祉国家の崩壊、経済のサービス化、長期的構造不況などによって、ミドル・クラスの分解、極少数のニュー・リッチ層と大多数のニュー・ブア層に分解していく。この事態は中流意識を背景とした現状維持的、経済主義的な国民統合の終えんを告げ、社会矛盾の激発と、帰属すべき共同体を見出せない『孤立化し無力化した』大衆を大量に生み出すであろう。こうした大衆を、家族—国家という擬制的な『自然共同体』に直接統合するものとして、天皇主義、新国家主義が登場してくる。」「(『論叢』第4号「戦後日本国家の再編と権威主義的国家主義」大村章彦P15)

我々が、反天皇闘争を地域政治闘争として組織するさいに際会するのがまさにこの状況である。しかもこの過程は、職場、地域、家族等、人間的生活諸領域の総体にわたって全面的に進行することによって、多重的、錯綜的な経路をたどって社会矛盾が激成されることになる。こうした事態に対して自然発生的には、「習慣の力」としての伝統的価値、保守的諸共同性が優位に立つことは経験的に明らかであろう。従って階級闘争史観の絶対的歴史的立場に立脚すれば、階級対立の非和解性が激成されるにもかかわらず、被支配階級内部の深刻な分裂、矛盾があらわれ、闘いは困難を極めてくる。ここに現下の条件の下での階級形成が、階級意識の自覚や、抑圧民族の自覚にとどめることのできない、政治活動(政治教育、扇動、宣伝)の重要な問題点がある。民族問題、階級的自覚に達して、ひとり潔よ

しとするのでは決定的に誤りである。敵の弱点を果敢にまた容赦なく突き、必要に応じて敵をあざむき、味方を保存する等の厳格な政治的戦闘に習熟しなければならない。堅実、頑強に地域における政治的組織的な基礎固めからはじめて、諸階級、階層のカオスの中から、権力—党—階級の相互の緊張関係を媒介とし、対抗社会・対抗権力運動の共産主義的中核隊伍を形成しなければならない。

他方、この活動を、我々が職場に基礎をおき、労働者階級の先進分子の結集をもって進めることによって、必然的に、現下の「労戦統一問題」と突きあたることになる。だが、現下の労戦問題、とりわけ階級的ナショナル・センター建設に関して、欠落しているのは、あるいは、あいまいで、かつまたあいまいにはならないと考えられる点は、「全民労連」が「『権力核』を中心とした政策決定システムとして、一種のコーポラティズムが指向されている」と分析する政治的認識である。この点が、時代に規定された「全民労連」=帝国主義的労戦統一運動の政治性格を規定する決定的ポイントであることを見落としてはならない。87年全民労連結成と相前後して、総評は、90年解散を決定した。この動向に規定されて、いわゆる岩井提言に沿って昨年いわゆる「無党派」左派を結集して10月集会が開かれ、さらに社会党左派、人によっては、共産党—統一労組をも含めた結集が構想され、すでに全国労組連の10月会議への解消、88春闘懇の発足等がはじまっている。だが、我々は、「全民労連」に対抗する階級的ナショナル・センター結成がいかなる内容と実体で形成されるのかについて、これをめざす人々の誠意と階級的良心について疑念はないが、いささか疑問なしとしない。詳細な検討は別の機会にゆずりたいが、基本的には、日帝ブルジョア階級独裁の権力核と直結する、ネオ・コーポラティズムの勢力に対抗する対抗原理の具体化の点で不徹底であるということだ。基本的な矛盾は組織問題ではなく、政治的問題であり、組織労働者の基幹部分の企業主義的統合と、膨大な未組織の放置、これのもたらす必然的結果としての労働組合の政治的社会的地位の没落という事態をどこで突破するのか?ということである。これが、労戦問題を検

討する場合の分析の入口であり、この入口を間違えてはならない。この観点からするとき、政治的選択として、「新しい社会運動」と隣接する「コミュニティ・ユニオン」等の地域的な諸運動に着手することが必要なのであり、それは政治的な階級的宣言を行なうこととは基本的に別の問題である。そしてそうであるからこそ、地域政治闘争を闘う職場からの立場と観点は統一されるのである。

2. 11「紀元節を許さない集会」とデモが東京をはじめとして全国各地で闘われた。これと時を同じくして、四国電力・伊方原発における出力調整試験反対の大衆行動が、3000人も集結で終日闘われた。中止要求の署名は60万をこえたという。この闘いはさらに、4月23—24日「原発とめよう1万人行動」にむけていっそう拡大していくだろう。反原発の闘いの重要性和

これを闘う主体の存在の重要性の二点において、これに注目しなければならない。もちろん、我々のとりくみは、まず、現実の闘いから学ぶことからしかはじまらないし、立ちおけているのは我々であり、運動の方がずっと前を進んでいる。だが、我々が真剣に地域に定着しその活動にとりくもうとする限り、こうした新鮮な人民の運動と出合うことはさけられない。我々が指摘してきた「新しい社会運動」は我々の狭い志向にかかわらず現に生み出され、新しい世代とともに存在しているのだから。

次々と我々の政治の狭さが指摘されるであろうし、我々もまたその狭さを次々と打ち破る積極性を体現していかなければならない。88年はこうした全面的な政治活動の基礎をつくる年にしなければならない。共に闘わん!

公開講座「マルクス主義政治理論の再構築をめざして」

われわれの今日の焦眉の課題は、新左翼・急進民主主義を根底から批判し、これに代わる政治路線—理論を創出することにある。すでにわれわれは、その一歩として『論叢』4号においてグラムシ、プーランザスの国家論に注目してきた。さらに次の目標として、①階級編成の実態と階級形成の問題を、また、かつての言葉でいえば「プロレタリア措定」の再検討を、対抗社会論などの摂取、再構成を通して行うこと、②現代資本主義と階級闘争の局面認識の問題を、「過渡期世界論」、「危機論」などの再検討と、20—30年代以降の国際共産主義運動の総括、教訓化を行うことの2点をあげた。

この作業を進めるにあたって、われわれはこれを単にわれわれの内部のみにとどめるのではなく、趣旨を共有化する多くの活動家、研究者との共同の作業とすべく、「構造と戦略研究会」を発足させることとした。多くの読者の参加を訴えたい。さらに研究会の最初の試みとして、中村丈夫氏を講師に招き、「マルクス主義政治理論の再構築をめざして」と題して3回の公開講座を開催する。第一回は3月

主催：構造と戦略研究会

12日で「第三インターと現代革命」、第二回は5月で「国家緊急権と革命的抵抗権」、第三回は7月で「第三世界と世界革命」を予定している。

第一回、「第三インターと現代革命」で、コミンテルン7回大会の人民戦線戦術に焦点を当てつつ、第三インターとヨーロッパ共産主義運動の歴史的総括と、現代への教訓を探ろうとするものである。講師の中村氏は、コミンテルン5回大会までを扱った『マルクス主義革命論史3・第三インターとヨーロッパ革命』（紀伊國屋書店）の編者であり、また未完に終わった第4巻『第三インターと世界危機』の構想を練った方であり、第三インターをトータルに把握する上でこれ以上の講師はいないといって過言ではないだろう。

第1回公開講座

テーマ：「第三インターと現代革命」

講師：中村 丈夫氏

時間：3月12日(土)午後6時～9時

場所：豊島勤労福祉会館・第4会議室